

Art in Hospital

患者と医療従事者に優しい病院環境をつくる

救急から介護まで「地域包括医療」目指す

②⑨ 平和台病院 (千葉県我孫子市)



格子のデザインがランドマークとなっている新館(左側の建物)。右側は本館

大正時代、千葉県我孫子市と柏市にまたがる手賀沼のほとりは、志賀直哉や武者小路実篤、柳宗悦ら文化人が住み、「北の鎌倉」と呼ばれていた。その手賀沼を南に、利根川を北にした土地に、1986年、平和台病院は開院した。

受付の待合に行くと、大きな石のオブジェが目を引き。「石には地球の過去の記憶が込められている」という彫刻家・岡本敦生氏の作品。地元の美術愛好家や我孫子市障害者福祉センターの入所者などの絵画も院内各所に展示されている。

同病院と介護老人保健施設「エスペロ」をつな

ぐ廊下は、レンガ造りの壁に、ガス灯が設置され、「病院らしからぬ雰囲気を出している」(広報室参事の山本弘之氏)。最上階の5階にあるレストランからは、富士山や筑波山を見渡せ、患者や家族、地元住民の憩いの場ともなっている。

土井紀弘理事長・院長が開院以来掲げているスローガンは「24時間救急対応」。同病院は2次救急病院として、我孫子市内の救急患者の4分の1を受け入れてきた。しかし、ここ数年、市内の医療機関による対応率が50%を切る状態が続いていることから、救急機能の強化を図るため、2010年



富士山や筑波山が見渡せるレストラン「イマジン」



受付待合に設置された石のオブジェは見る者の想像力をかき立てる



和風の雰囲気でお過ごしください予防医療センター



レンガ壁とガス灯がレトロな廊下のギャラリー



グループの介護老人保健施設「クレオ」の中庭に設けられた茶室一般の人も利用できる



救急センターに沿った約220mの歩道は、平和台病院の敷地を提供して設けたもの

3月、3階建ての新館をオープンした。

患者のプライバシーを守るため、病室などの窓の外部に格子を付けた外観がユニーク。1階に救急センターを開設し、これまでの倍以上の年間約2400件の救急搬送に対応できるようになった。診察室3室、応急処置ベッド3台、観察ベッド5台を設置。CT室とX線撮影室も整備した。2階の急性期病棟には40床を確保。HCU(重症患者病棟)を4床、感染対策ベッドも2床設け、救急搬入から入院への対応を迅速に行えるようにした。

新館のもう一つの柱は3階の予防医療センター。

人間ドックや健康診断などを実施、検査ごとに部屋を分け、専用エレベーターも設置し、プライバシーに配慮した。新館のオープンによって、2000年から推進し、グループ内外の施設・事業所間の連携で、救急から介護までオールラウンドに応える「メディカルプラザ構想」が一段落したという。

平和台病院は03年からJICA(国際協力機構)の海外看護指導者育成コースの研修生を受け入れている。受け入れ機関は国公立の大学・病院が多い中、同病院が評価されたのは地域包括医療を実践してきたためだ。

「地域」と「人」が安心を育み届ける場所

③⑩さいたまメディカルタウン (埼玉県さいたま市)



正面の壁は漆喰。目地のない一枚塗り。塗装の際は小峯代表も自らこてを手にした

「安心」——さいたまメディカルタウン(SMT)が目指すものはこの一語に尽きる。6月でオープンから2年。最先端の医療機器による画像診断を提供する「さいたまセントラルクリニック」を旗艦に複数の専門科診療所を集めた医療モールだ。

不動産を中心に事業を手掛けていた小峯宣昭代表にとって医療機関はまったく畑違いの分野だった。

「利用者の側が『ありがとうございます』と言うことに違和感がありました。その割には申し込んでも、日数がかかる。すぐに結果も出ない」

医療職ではない小峯氏の疑問からタウンは芽吹

き始めた。「検査で待たせない」「治療が必要なら専門医療機関を紹介する」。オープン当時、そんな医療施設がさいたま市周辺にはなかった。人口120万人の政令指定都市の意外な一面である。

各医療機関は懸命に取り組んでいる。ただ、絶対数が足りない。「医療過疎」といわれる埼玉県に住んでいるというだけで病気が悪化した、では困る。

病院での検査を代行する。医療機器を共同利用してもらえばいい。会員制の「さいたまメディカルクラブ」では利用者の快適さをさらに追求している。

小峯氏の個人的な経験も作用した。父親が「心



エントランス。太陽光を生かしたつくり。植物が効果的



2階カフェラウンジ。音響にも配慮。イベントスペースとしても使える



PET-CTの待機室。周囲のカバーには鉛が入っており、放射線から防護



ビジター用ラウンジ。内装は誰にも好意を持たれるハワイをイメージ



クラブ会員専用エントランス。専用エレベーターでラウンジまで行ける



さいたまメディカルクラブ会員専用ラウンジ。現在の会員数は約100人

筋梗塞の疑いあり」とかかりつけ医に指摘され、診断までに2カ月を要した。その後、男性には珍しい血管炎を発症し、すぐにカテーテル治療に入れなかった。治癒し元気になったが、疑問は残った。

小峯氏の祖先は現在SMTがある地で300年にわたって農業を営んできた。作物を育てる上で欠かせないものは何か。土地、日光、水だけではない。「人」だ。小峯家は代々地域に助けられてきた。

「いろいろな方にお世話になってきた。地域に何とか恩返しができないか、と考えてスタートしました」

安心の上に安全で素早く検査を受けてもらう。2

年間は無我夢中。周辺の医療機関の認知度も上がってきた。何よりすべてのサービスの原点である医療スタッフも育ってきた。ここでもやはり人、だ。

「100年先でも通用する建物、中身にしてください」。小峯氏は設計担当者に注文を出した。決して目新しいものではなく、最新の技術を投入したわけでもない。答えは地域にあった。風土に合った建物こそ、時を経ても朽ちない。漆喰の白い壁はその象徴。農地に根ざす「土の文化」に着目した。

「今後は形を変えず、中身を濃くしていきたい」——日々の積み重ねあってこそその100年先である。